

## 特 集

## 人間にとって地域社会とは

京都ノートルダム女子大学教授 室田 保夫  
 関西学院大学名誉教授

今回の特集論文の課題は「地域」あるいは「地域社会」という視点で編むこととなった。人間の営みとして当然、我々は地域という社会の中で暮らしている。そこには何らかの隣人との関わりがあることは自明のことであろう。しかし現代社会、他者との関係も希薄になっており、現実の地域と呼ばれる生活空間の中で、隣人同士でも、その関係は過去と違い変容している。例えば独居高齢者の課題は重要で、過日の『毎日新聞』（11月11日）の一面の見出しは「孤独死1100人8割男性」という大阪市における実態調査結果が報告され、とりわけ男性の地域社会との繋がりの薄さもあり、「地域に参画しやすくする仕組みが必要だ」と指摘されている。

人間にとって地域とか社会とはいかなる存在なのであろうか。「社会なんてものはない。男女の個人がいて家族がある、ただそれだけだ。」というようなサッチャーの言葉が紹介されて久しい。しかし今だからこそ、人間の福祉を考えて行くとき、この「社会」や「地域社会」の意味を考えるのも大きな意味がある。そして昔から社会は社会学や民俗学、あるいは福祉学の対象とも成ってきた。ともすれば自助、公助、共助といった概念があり、現代社会における人間の福祉はこうした概念で語られる場合が多い。かかる課題を抱える中での特集企画であった。そして以下の様な文章を執筆候補の先生方に送付した。

「地域社会」という言葉を広辞苑（7版）で引くと「地域」は「①区切られた土地、土地の区域。②住民が共同して生活を送る地理的範囲。③数カ国以上から成る区域。④国際社会で、独立国ではないが、それに準ずる地位を広く認められている領域」とある。一方、「地域社会」には一定の地域的範囲の上に、人々が住む環境基盤、地域の暮らし、地域の自治の仕組みを含んで成立している生活共同体、コミュニティ」とある。「地域」には地理上のある区切られた空間を意味し、「地域社会」にはそこで暮らす人々の生活や自治、環境を含む「生活共同体」というニュアンスがある。

ここに人間や福祉という言葉を介在させると、我々の日々の生活が入り、大きくは国家、府県レベル、小さくは町村や自治会といった近隣との人間相互の営みの中で成り立つ社会であると言えるだろう。そしてお互いが人間の顔や心をもって成り立つ社会である。しかし現在をみってみると住民同士のつながりや紐帯は薄れてきている状況である。もちろん、「人間と地域社会」との関係は長い歴史の中で築きあげられたもので、柳田国男、宮本常一らの民俗学の対象ともなってきた。そこには人々が自然村の中で自己の生活と生存を必死に生み出していくシステムが存

在した。

翻って現代社会も特有の都市や対象的な田舎、村落の問題が顕在する。具体的には都市マンションやアパートに於ける住民同士の無関心、共同意識が希薄になった生活、田舎の限界集落の課題、これは将来の「人口問題」とも関連するが、さらに外国人労働者の受け入れや、その地域との課題等々、こうした重要な課題が浮上している状況である。中でも地域社会についての根本的な課題を我々に迫ったのは東日本大震災でもあった。生活と地域社会の課題は多くの、かつ様々な問題を浮上させている状況である。

かかる課題に対して、自分たちの生活や生存をまもっていく多くの試みもある。従来と違ったNPOの出現やその活動、新しい公共団体の状況、自治体でのカフェの取り組みなど、地域社会を背景に組織もうまれつつある。これらをもう一度、「地域社会と人間（のくらし）」「地域社会と福祉」というような切り口でもって、様々な角度から見えていこうとするのが今回の特集の意図するところである。

こうした趣旨のもとでの特集企画であったが、依頼した学問分野の違う6人の先生方全員から快諾をいただき、そして玉稿をいただくこととなったことは感謝に堪えない、心よりお礼申し上げる次第です。

ところで、この10月、東日本をおそった複数の台風とその後の水害は相当なものであった。ま

さに社会学者の指摘する地球規模の『危機社会』の提起したものと符合し、一方で「個人化」という概念はその課題をも提起している。まさに今、この時代に日本も直面している重要な課題である。今を生きる我々はこの時代に沿ったニーズがあり、それに向けて21世紀に相応しい試みに向けて智恵を出し合って構築していく必要もある。反省的視点、グローバル視点、そして土着への視点、一人一人の人間を生かせるような、想像力を駆使して構築していきたいものである。

岡村重夫は地域を考えると「民俗学」への接近の必要性を指摘した。「民族としての福祉こそが基底となって、その上に社会福祉制度や社会福祉文化が消長するということである」(『地域福祉』121号)。そこには人間が連綿と気づいてきた福祉制度とともに、生活の中に埋もれた智恵もある。我々には制度とは明確でない生活に埋め込まれてきた「日本的な互助社会」(恩田守雄『互助社会論』)も存在している。しかし我々は新しい智恵を働かせながら、新しいシステムの構築も要求されていることは言うまでもない。地域社会は時代が変わろうと人間が智恵を出し合って気づいたものでもあるからだ。

社会の様々な課題や福祉、そうした課題を解決していくのは、我々自身の叡智にかかっていることにある。そしてそれは日々の生活の中で、そして「人間福祉学」として考えていかなければならない課題である。